里見八犬傳

第二輯

巻二

へ13
3416
7

へ13 34 1

弐編五巻之内

二

勝善院

南總里見八犬傳第二輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第十三回　尺素を遺て因果みづから紘ふ　雲霧を拂て妖孽はじめて休

伏姫はおもひかけなく。奇しき童に說諭されて。無明の眠覚たるがごとく。とぞおもふに跡も見えぬ人の言葉のあやしさに。なほ疑ひはなかれども。涙乃雨に敷妙の袖はしぼるばかり腸を絞るばかりに咽びけり。歎きは沈せなひたりしが。あれども心操。人にすぐれて立まさる。日来雄々しき姫なれば。うち騒ぐ胸をおし鎮め。額にかゝる黒髪を。掻あげて目を拭ひ。つく〴〵ある前世に。造りし罪は秤成ありさ軽さへあるらめど。遂にこの身に報ひ来ぬ。かくまでおもふ事にのみ人のうへのあやまちさに。遮莫親のうへに。

かゝる祟を負ぬれと受ては後のその後の世まで。捺落の底に沈むとも。
悔しと思ふべうもあらず。只はづかしく悲しきは親のため。又人のために逢き
心なきものに何の種なる畜生の。その氣を受て八の子を身に宿しぬるは
いかにぞや。そもこの山に入りし日より。鶴の林の志げきをこえ鷲鳥の嶺の
高きを仰ぐ。一念不退読經の外は。よに他事なきものから佛も一くに
救ひ給はず。神さへ助け給はずして。有身となる身の実なふべよしや臥房を
共にせずとそれは解ん證據はなし。さばれ人のさる親乃恥。九の
世を換るとも竟に雪る時しあらで。只畜生の妻といはれ生ての恥辱。
死しての後にも喩るに物あるべしや。よしや鬼の毛乃末なく露だちも
ざる身ながら。暴に瀧田よりきたれ犬を殺しくみると云死
ざりてそ悔しけき死べき折はありながら。死おくれしも業因欽されバ

善巧方便とやらん。説せ給ふなる佛の書にも有けなり。因果といふもあまり
あなるよしや。この子の生れなば旡に親同胞に幸あらなく。家の栄をおかせばとて。
さようきは恥よやはあらん悲しきかなと声立て傷の人にものいはず。せめ
凝ては泣かくに貫しき心も乱れなり。忍ぶに堪ぬ繁薄尾花が下に伏し
あふ秋の日影のさらなげるなく。昏間は暑の名残とて。岸に水浴る山鶏頂近く
鳴こくなく伏姫信と仰ぎ瞻り現こなたに外に人もなかなか宜に畜生道
この身を劈く劍の山路に追登されし阿鼻地獄後の世思ひやられなる。
さりながら。彼童子そ不思議なれ。こなたまし人とひききと思ふ審にさとれる
なり。天眼通のごくなる如し。加旃ものいはざる。爽に岩ならこの山川よりく
妾なく禍福吉凶を断るも只常なら指を似てりいふ人の指の神子。俯が
老女といふとも。いとなつかしかざらなるべし。ぞれそれ神なるらぐ。誰ろ復

まゝに成よくせん素よりこの安房ゐん。齢数百ゐゐとぬる醫師あるこゝ成ゆ
ざるべいこれゐ仕る神童あるべうも見えぬゝ。渠只假ゑ言を殘ゝこゝ成醫師の
弟子ゐゝく。茅成採るといひつるの欲。そのそる所も定ゐゐゐ。この山乃
麓とのひ或ハ洲崎ゐあゝといふ。こゝ成みゝくゐひあハをゝ。これも亦役行者
の示現ゐりやをゝ〜ゐをゝん。曩ゐもかゝる利益あり。それハ穉ゝ時ゝ成ゝ
吾倘定ゐゐゐ孫ども。正〜く得さ〜ゐひぬる。殊数ハ霎時も身を放さど。
祈念懈るゐゐけをゝ。再び奇特をゝんせゐゐども。遂ゐ脱れぬ業因を。
神も佛も今まゐゐ。せんをゝるゝぞゝハをめ。ゐゐても凡夫のかゐゐ〜さハ悟ゝ
ゝく。迷ひ易ゐり。こゝ腹ゐゐハ子ゐゝく。形ゐゐぐさゐゐ生ゝ。まれて後ゐ
又生ゐとハいゐゐる布ゐやあゝんをゝん又子を産ゝ凡親ゐあゐん夫ゐも
あゐんとハいゐゐゝ。ゐひ辨へゝ。吾倘ゐゐ苟ゐも。いひるゐけゝゐ良ゝハゐ〜。

とのゐゐのゝゝ中らゝとゝゐり〜又ゐゐんがゝゐゐゝと。訪せゐゐゝ新携〜ゐゐゐく
ゐゐゝ〜ゐ親同胞ゐ恥かゝゐゐ。ゝゝく〜ゝゝゐゝゐり。流ゝく水ゐ身を任〜。骸も
とゝゐゝゐるなゝゝ。さて死恥をかゝ〜ゐん。吁ゐゐゐん。とゝゐゐゐ問ゐれゐ
答ゝくゐゐゐ。ゐひ決めゐ。ゐ為ゝく草ゐ藤突立ゝゐを起〜。水際ゐ立
ゐゐとゐひ〜ゐ。さゐゐてもとの侭ゐ。水屑とゐゐゝゝ日来より。川の向ひの岸
ゐゐでも。専使をゐゐり。毋ゐゝのゐん慈を。ゐゐゝゝゐ似ゝく罪ゐゝゝ。
一筆送〜ゐゐゝゝとてもかゝても業因とゐひ捨させゐゐゐん。ゐる人ゐゝハ
ゝゝゝ尺素も。朽ゐゝゝ朽ゐゝ命毛を。霎時延〜ゝくいそゝん。とゐゐゐゝ
捨〜。ゐゐゐゐゐとゝゐゝゝ。ゐゐゐゐゐ際脆ゝ村肝のゐゐゐ足もゐゐゐゐゐ舊の
洞ゐゐゐゝゝゐゐ。當下八房ゐ自然生の暮蕨枝つゝの果ゐゐゐ。ゐゐゐゐ
ゐてゐゐ。姫ゐゝ成ゐゝゐゐ。只今かゝゐゐゐゐゐ成ゐゝ。一及ゐゐゐゐ去ゐ出

長兄袂を掩ひ寅縁く。後を跟て又先コ立尾を掉皇を鳴〜ほく迎へる
ろぶ如くしく。只管食を勧まとる。伏姫ハ涙くみ乍も斎戒〜く蹠〜
くく。絶て言葉もなけれども。石室の端ちかうゐく。硯コ筆を揭流〜。
まくるくなつたふる。料紙の皺を引延〜くこぶう人稚者の示現まで。
辞みじく義理ふく。いと哀ましきもの。写ふ折〜もあれ水ハ瀬やうふ
裏えく。三国大夫がうゑ。想像るべく。松ハ峯上ゆ吟〜て。有馬皇子が
無常を示せり。いゆ〜より今の世まくぐ。賢えも愚えるも。直えも曲
まるも。薄命ようく屍を溝瀆野經ゆ曝せるの。抑亦いくばくぞや。
そゞ妻。そゞ子ゆ至まてハ数ゆいとるゝ。いづまハまどこぶ
又却とる。例まくるえ業因ゆく。骸ゆもとめど失ゆえと冊う人偽ゆのるぐ。
そゞ俗絶も果ゆん。そまゆでコ在さんとも。るえ後さんゆ限りるえ。

嘆ゆ倍させなる。不孝の罪ハ贖ふ時ゆ〜。幾遍ゆひさえるんと思へども
ゆひ絶ぐこえハ只恩愛の絆コ許させゆへといへばえよ。いゆ根ゆ松の
露。袖の雫コ末竟ゆ涙乃川とるゆでゆ流えるひを水莖乃筆ゆ
いせく続へ〜。巻へ〜ゆ嘆息〜。よるく却ゆひえ西方弥陀の
利剣を借まゆ煩悩の羈を断ぐ冥土の旅の首途ゆ称名の外あるぐ。
と忽地ゆ思ひえ〜ゆ。ゆをゆて来〜菊乃花ゆ清水を浜く恭〜く。
佛ゆゆ向なり。襟ゆ掛る珠数を取て。推揉んと〜ゆふゆ。常ゆもゆで音ハ
せぐ。ゆハ不思議やと取るゆ〜。そまるかうさるえゆふゆ数とり乃珠コ
顕まる。如是畜生發菩提心の八の文字ハ跡もなく。いつの程ゆ仁義礼
智忠信孝悌とうりかゆうく。いと鮮ゆ続まとり。伏姫ハ又さゆふかる奇
特をえるゆうゆ。なゆ不疑ひを解ようく。ほうく。ありひゆふゆ。この珠数

そゞ之ハ仁義礼智云云の文字あるとかくく八房よ伴ひとの山ゐ入らんと
せ〜ル如是畜生云云と八の文字ゐるとて〜ゑび果〜く伴の一句のゞく。
八房も亦ちゐ菩提心を發し〜ら。余ゐ又畜生四足の文字ハ失く
舊の如く人道ハ行を示さゝ之ゝ權者の方便測ゞ〜いと淺ゝ先ゐ
女の智をゆく。何と辯へ給ふんや。ゝる所ゑのて推と之ハ吾倩ゝ犬の
氣を受て平ゝらぬ身とゝるゐ〜ゑよ遂ゐ非命よ終ゝ之畜生道乃
苦艱よ似ゝり。さ之ども佛法の功力ゝく。八房さ之ゐ菩提よ入ゝり。素
世ハ仁義ハ行の人道よ生ゝく〜ゑ。さゝゐ示さゝのゝゐの教ゝ〜さあゝ
ゐハ八房をもゝ。ゝゐゐゐ殺さゞ畜生の苦を拔くゝとゝゐ之ぬべ〜。
いゐゐくそれハ不仁ゝり。渠ハその主乃ゝゐゐ大敵を亡〜たゝ之。かゝ之ば
是ゐよゝゐ之忠ゝり。又去歳よゝ〜ゝとの山よ。吾倩ゞ飢渴と凄せゝ。

かゝ之ば又養ひの恩ゝく〜ゝ之。〜〜や未世ハ人と生ゝ之ゝく。富貴の家の子とゝる
ゝゝ。その忠ゝこの恩ゝるゐ。ゝゐ今情ゝるく刃ゝく。〜〜死を促ゝゐ忍んやゝれゝの
ゝ之ゐゝりの隨ゐ告て生死を渠ゐ任せん。さゝゝとて殊數を左ゐゐ掛前
足突立ゝるゝこのゝ。眺めをゝる犬ゝゝゝ向ひ。やゝ八房ゝゝゐゝゐゝ之ゐよく
ゐけゝ。ゝゐゐ幸ゝゝ之ゐの二ッゐゝり。又ゐゐゐゐ乃ゝゝゝゝゝり。則吾倩と
汝ゝゝり。ゝゝ之ハ國主の息女ゝゝゝ之ども。義を重〜ゝとゝゐゐ名ゝ畜生ゐ
伴ゐ。ゝ之ゝこの身乃不幸なゝり。ゝゝれども〜犯ゝ之ども。ゝゝゝゝ世を
遯ゝゝく。自得の門よ三宝の引接を希ひ〜ゝゝ遂よ会願成就〜ゝく。ゐゐ
往生の素懷を遂ゝゝ。亦ゝ之ゝこの身の幸ゝゝり。又只汝ハ畜生なゝ之ども。
國ゐ大切ゝゝゝゝく。賦て國主の息女を獲ゝゝ。人畜の道異ゐ〜ゝ。その
欲を遂ゝ之ども。耳ゐ妙法のゝゝ之を聽ゝく。遂よ菩提の心ゐ發せゝ。

こと汝が幸ひなり。されども生をうえ形と変るみよりうるはしくみ四
そくく足の苦を脱れざるはそくハその智をあらとるく死してハ後その皮を剥きん。
亦こと汝が不幸之。汝生れてより七八年犬馬みくるそ乃命短しゆ
いふべうもなどいふこづふみ生を貪ふこと死をるれ人ハ里みを還らハ友みを嗤き。
笞みを打ち呵責忽地その身みを及人又この山みを住るとも翌よりしてハ雑ろ亦。
汝が唱みを経を読べき梵音耳よ入ればうるべ菩提の心遂よ失ふん。只
生を辞し死を楽ふ人道の果を希ひ。来世みを人と生れざらんやこの
理つれよく考へべ。おのゝ流よ身を投く。共よ彼岸みを到れ。されども
時ふ早ふ。こゝも浮世の名残り。且ハ経を読誦しく心ちづみ
えよ眠ふん汝もこれを聴聞しく。讃果うんとを伝ふ起て水際よ赴け
うさうとも不覚よ命惜くハ野ふ里ふれ老死よ。命ふん人果を得る

とゝるふん。よく辨へよと叮嚀みを諭しゆへハ房ハ頭を低く憂るこゝ。又
尾を掉て打ぶ如く又感涙を流ふ似ふり。伏姫ハこの形勢をつくくと
見ふひく。去の犬戒よ得度せり。然るのみ後身うるとゝも既み仏果を
得ることんふ。夫義成ゞ耳孫の世ふく絶く障礙へあるべうもど心中ハ
とゝひとゝく。彼送書と提婆品の一巻をみみ取く。洞ふる些をみ
出。讃誦しく絶らべ送書をもん経みを巻竜てこの石室みを留人とゝひつ
上平なる石を机よゆゑ組く。彼一巻を額みを当且く念じひつ。たや
讃出しゆふみそ八房ハ耳を側て。さくと生平よりいと切ふり。抑提婆達
ヨヌ品ハ妙法蓮華経巻の五よ在て婆竭羅龍王の女児ふとよ八歳よ
ちく智恵廣大ふく禅定みへ入く緒法みを達しく菩提を得る縁故を
説ふる経文ふり。女人ハまゝ垢穢る。素よりふ法器みあらぬ又身みを五

神変大菩薩
ふつさ

妙經乃
功徳煩
惱の雲
霧を拔
金はり大さけ

障あるに故に成佛なりがたしめ入介伊に八歳龍女のごとくなれども無上菩提を得るに便是女人なりがたく成仏の嚆矢伏姫末期に及びて身の為又犬の為に提婆品を読ませ給へ限りと思へば音声高く澄渡るに又委敷〻く蓮の糸を引く如く又出水の麦畠に似る峯の松風のごとく和〻谷の幽響のごとく庭の石を集く聴衆とせ〻む〻かくぞあるけん〻〻とも愛さえ道心ありさる程に読経も既に果ありて三千衆生發菩提心而得受記智積菩薩及舎利弗一切衆生黙然信受と續き八房は衝と身を起〻く伏姫を見えり見えずして水際を指くやく往に前面の岸に鳥銃の筒音高く響き〻く忽地邪毒の二つ三つまで八房は吭を打ちて煙の中に礮と仆〻あるに九に伏姫も右の乳の下打破られて苦と一声叫びもあへず絶命をも含みぬ。

横ざまに溝渠に倒れ時に去歳よりまたあらたに霜降く。川よりまたあらたに去歳よりまたあらたに霜降く。絶く晴間もなくまた今鳥銃の音とも拭ふが如く晴ぬるまで年なれども一個の猟人柿に溜りて桙の脚半に。おのゝ〻色なる甲冑〻く縫織乃猟巾の緒を結び放べく項に掛け。右に鳥銃引提て前面の岸に立あらに流る水を信と云て既に浅瀬を知りぬるに躍く岸より走ぬるまく。今なる鳥銃肩にうち掛てあらぬ指てあらぬ〻まつとの川なれども。ふるまは似ぬ〻〻く水は高股を浸さるべ彼壮佼はまもく勇まして勢ひ猛虎の子を負ふ〻く又驟象の牝を追ふ〻く。ちく〻足を踏進めくその幅十丈あまりなる流水を切く瞬間にあらぬこの岸に走あぬり且る銃を揮揚く打倒〻く八房とあるに撃て五六十。骨砕け皮破れて復甦ることあらぬに茫然と笑く鳥銃投捨いで姫〻人を〻と石室のあとりまで進む

寄りつゝ見れば伏姫も。打倒されて気息なしと見えしかば駭きさわぎ
とく抱き起し。且瘡口を展検るに幸にして疵は浅くり周章て懐
よりよき薬を取出して口中に灌ぎ入れ。頻りに喚活すれども寸口の脈絶果て。
全身は冷や氷の如し。縦令元化が術ありとも救ふべうもあらねば壮佼は
天うち仰ぎて数回嘆息し。悲しさやるかたなき所謀る所は悉く鶍の嘴と
齟ひ。月来日来晴らざりし狭霧は晴つ八房を撃とめしくまてゝんまゞ。
あやまる丸に姫うへさへ竟に鎗絶ぬるにけり出没奇異なる犬なりとあなど
りしに固よしと禁断の山と志して身を忘れ命を捨ても姫うへを救ひ
とるまゐらせんとおもふ忠義は不忠となりて。又万倍の罪を醸せり。百遍
悔ひ千遍悔ども今はしもかひなかりけり。ひたすら身のやるかたなきは肚切て
姫うへの冥土の御供仕らん。さらば。と襟かき披きて。腰刀を抜出し。て

咽に巻そへて。南無阿弥陀仏と唱もあへず。はや刀尖を脱腹へ突立んと
する程に。誰とは志らず松柏の林が下に弦音高く。射出せる猟箭に壮佼が
右手の臂射削られて。これはとばかりもちたる刃をうち落され驚き
あわてつゝ見かへれば樹間隠れに声高く。鼯は木末求むと足引の山の佐都
雄に遭ひけるかも。と口吟む一首の古歌に。とばかり什麼誰そと向せも果ず。金
碗大輔早まるな。且く等と呼とめて。里見治部大輔義実朝臣の
皮の行縢に豹の尻鞘篠餝しく。弓箭携へ徐かに樹蔭より出来つ。
後方に続く従者なく。堀内蔵人貞行のみ精悍しく打扮て。主の左邊に
引そへたり。義実愁然気色して伏姫の亡骸を尻目にかけて寂期の有さま
いかゞ何とも宜はず。いちはやくもほろほろと落る涙数と遺書をとりあげて。
蔵人あれを。と宣へば。貞行は遠しくとゞまりてまねかせる。

義実朝臣ハ弓箭を捨て。珠数を刀の鞘に掛且遺書を見る毎に一句一涙
毎に嗟嘆せられざるハなく。又貞行にも見せ給ふに其中に金碗大輔
孝徳ハ慚愧その身を置処もなく。額に冷汗をながし刃を膝に引そ
敷て只平伏てぞゐたりける。当下義実ハ傍の石に尻を掛て。孝徳に
うち對ひ咄よしたるは金碗大輔汝不覚に法度を犯しく。この山に入る
のミならず今伏姫と八房をうち殺せし事ハ仔細ありとも刀をおさめよ。近う
来よ。詳にとき示していへ、いふぞやと問給ふ。されども孝徳ハ應まうす事をも
面なくて霎時頭を得も挙ず。この形勢に貞行ハそゞろほとりにきて急し
大輔何ぞゆゑぞ且刃をおさめざるや。とくもん答ハさぞやとあからくいはれて
孝徳ハやうやく頭を擡刃を鞘に納めつ。挿副の刀もろ共足本へ堀内貞
行に遞して些引退き又貞行に對ていふやう。死後まてなる甲斐に図らずも

君の尊顔を拝し奉りしも重ての越度なく後悔の外なけれど申とくべき
千万句も。この期に至て詮なき所為の非を飾るに似たれバ只一條を
申上ん去年安西景連に謀られて安危の使を果さず脱れて
走る道もがら追捕の敵兵と血戦し辛く瀧田へ立かへるに景連が
大軍充満稲麻のごとく攻囲む最中なれバ城に入るを竟に協ず。
切く和殿に力を戮し一臂の忠を盡んと思て駈て東條へ走りけども
その甲斐なく彼処も蕪戸納平が大軍に囲まさり。敵ハ虎口を退らず。
夜ハ篝火を焼あかし。番兵きびしく由断せざれバ翅なくしく城中へ
入るべきやうもなし。一騎なりとも敵陣へ突入て死なんやと思ひ決めしひ
しが。退て思慮をめぐらし。ゆ人ハこれも亦詮なき所為なり五指のかはる
がはる弾んより。一拳にまゆるを西城素より兵粮乏し。寔に危窮存亡の

秋なりしに。鎌倉へ推参して。管領家へ急を告援兵を乞催して両所
の囲を殺崩さば君のおん為此上あらじと思ひしかど。白濱より便船
なくて彼地に赴きし来由を述急を告援兵を乞といへども主君の書翰
なければ疑はれて縡とゝのはず。そうだのある日を過して。空しく
安房へ入れば景連ははや滅亡て。一国君がおん手に属ぬ吁歟し。や
思ふにも寸功もなく阿容々と見参に入りがたし。然ばとて今さら
腹も切られず時節を俟て功を立帰参を願ひ奉らん。それより
隠宅にとて舊里なれば上総なる天羽の関村に赴きて。祖父一郷の由
縁ある荘客某甲が家に身を寄せたりしを。去歳と暮れ今茲も
おなじ秋の色深く潜びてありしに本月の初旬。姫うへの事仄に聞えて。八
房の犬に伴れて冨山の奥へ入らせ給ひしと。慥に告るものあり。しか

未曾有の奇談にして偏に主君の瑕瑾なりしや。彼犬年ありて人を魅
霊あるとも目に遮るものなくば撃ことやはある。冨山に
登り犬を殺して姫うへを救ひとり奉らば先非を贖ふ帰参のよすが
ならんと尋思して潜びて當国に立入り。准傍の鳥径引捉て。
山に入ることは五六日。姫うへのおん所在を只顧索まつるに。あなたの岸には
秋霧ふかくて一日も晴ることなければ水の音のみ凄じく。廣狭深淺も
測りがたし。蜑崎輝武が溺死のありさへ想起してゆくべからずと推量
なくかくなくて給がされど川一條に隔られて奥に入るべきかたなきのみ。
けふも空く暮まさんとするに頼みに焦燥の果は疲労て水際の松に
凭うち掛てまどろむほどに。名も知れぬ溪澗のなかりかあなたに
経よむ声のかすかに聞えけり。さてはやと騒ぐ胸を鎮めて水際にまさつて。

耳を側てつく／＼と聞ば女子の声なれば、疑ふべうもあらねど、姫うへはなほ[illegible]
べし。既にそのおん声を聞つゝ、いまだおん姿を見るよしなし。この時おもふて神明
佛陀の冥助を仰ぐにあらざりせば、志を遂がたけん。當國洲崎大明神
那古の観音大菩薩、孝徳が忠義空しからずは、狭霧をおさまらしく
この川を輙くこさせ給へかしと、丹誠を抽て且く祈念して目を
ひらけば、不思議なる哉、今までも黒白をわかぬ川霧も、拭ふが如く晴
わたりぬ。前面遥に眺望すれば、石室とおぼしき處にこそ、それと見えたる
姫うへなり。さらばより瀬は淺し、何でふおそろ勇ざらん。既にわたらんと
する程に、八房はおそろしげに見えてや、水際へ指て走り来つ、這奴よせつけ
てはあしかりなん。妨とならば、後にてぞ彼奴をば射とめんと、矢ごろはか
狙よくうかゞひつ、含る鳥銃取なほし、粗固めし二ッ玉、火蓋を切ば

怒さへ犬は水際に仆れけり。かゞ物獲つと早川の水よりも早く渉来て
見れば又姫うへも、あまれる丸に傷られて、枕に婦しあふさりけれ
ども瘡は浅ければ、済ませ給ふものやと、ところに盡して弾せども絶
息へべきもなし。身の落命とふのみぞ。毛を吹て疵を求める
後悔其刹に立ざりけれ。切て冥土のおん供せんと、既に覚期を究し折
ならひけるに、これが君に禁しられたまり、得死ざりしも天罰なり。法度を犯
しつくとこの山へ入ものゝ、さらに姫うへさへに害ひしは、是八逆の罪人なり。
君がゆゑに刑罰を希ふ外なし。堀内ぬしも、鈍人どもの索うけなりと背
ざるにめぐらしつゝ、みづから貞行の孝徳が忠心残よくあらはしけ
る毎に点頭つゝ主君の氣色を伺へは、義実嗟嘆大かたならねど、且して
宣ふやう。現禍福得失は人力をもてよしなし。凡智をもて揣べからず。

ゆをと大浦汝寔みその罪あるを刑罪追ふてとのゝども伏姫が死ハ
天命なり渠ら汝よ殺すとぞ。かゝるごとの川の水屑とさらん惡人
その遺書を續ぎ世せよと宣へ。うけあゝうと意つ。大浦がほとりを
つゝみく首より尾りまゝく。高ゆみ續わどみ孝德ゆもく慚愧しく。
伏姫の賢才義烈ゆ感涙を拭ひあくぎいよく無名悔歎ぬ續果
けるが義実ハ又孝德ふゝち對ひ大浦何とさゝろ沼ゝぞ伏姫が死を
禁ん〻とく。ゝゝ亦潛びく。まつるみあゝぞ世度五十子が病著ハ只
伏姫を愛惜の心氣疲労ゝく危急ゆ及べり。渠が孤ひを考ゝと
ゝぐゝゆ異ゆ〻とゝの山の奥ゆ入ん〻ゝとゝ。とさるかうさる
ゝゝ折。ゝゝのゝゝるゝぐ惡人ゆ如此ゝの示現を沼ゝよゝく
後者ホを麓ゆ留め只ゝゝと負約とゝの山ゆ登るめゝ。示現ゆ

任〻く川をゝゝさぞゝく水上を免ぐゝゝ。この石室の背ゆ到ゝゝ。
主後既みとの刻ゆ近つんとゝる後ゆ鳥銃の筒音ゆゝち敬馬きく
ゝて〻ゝ伏姫も八房も矢庭ゆ擊ゝく仆ゝゝ。折ゝゝ川を
渉ゝゆ同ぞく伏姫が讐ゝけ。とゝて〻れば。霎時樹蔭ゆ
躲ひく。綽のゆゝ窺ゆゝ豈ゝんや癖者ハ月来日来ゝゝ
金碗大浦ゝんとゝ渠驚ぎ居ゆゝ。ゝゝ姫を浴ゆ盡を療
養ゆ届ぞく。自殺の光期ハ野心のく姫を殺せゝめゝ。
ゝひゝけゝが呼ゝ先ゝ。汝みづゝ思惟ゝ犬を殺ゝく伏姫をゝく
ゝゝ。ゝのゝゝ義実ゝゝゝ恥をゆび最愛の女児をゝて。けゝ
ゝく汝ゝゝゝんや。賞罰ハ政の樞機ゝゝ言一ゝび出ゝゝ駟
舌ゆ及ぞ。戯言とゝゝども八房ゝゝ伏姫を行ゝゝとの一言も剛敵

亡び四の郡は義実が掌に入ぬる。只八房が大功なれば、これも前諾を
変がたきに由なく。姫も亦これを固辞がたど。そが隨に犬に伴れ蹟を深山に
住むといへども、幸にして穢されず。一念読経の功力によりてか、八房
さへに菩提に入りぬ。渠が蠢欲なれをしへて、伏姫これを憐み、情ふか
縁しえしく、えらびしてその氣を感じ、有身まるをいよく奇なり。
今その筆の跡をつらくくに、禍の胎るところ因果の道理を知覺せよ。
これ當國に義兵を揚て、山下定包を討しとき、その妻玉梓を生拘つ。
陳謝理りあるに似たれば、赦しやらせんといひつるを、大輔が父八郎孝吉
いたく諫て既に刎らり。これによりてその冤魂ながら主従に崇をなさと
欲とせしめてむつれさせしん。金碗孝吉が自殺のとき朦朧として
女の姿ながら眼に遮ぎられ。かくてかの玉梓が、うらみはせつに嘆らねど。八

房の犬と生かはりて、伏姫をいざなひて深山辺に隠れつつ、親に恥をあはせ。
伏姫は又おもひかけなき八郎が子に撃れたまひ、加以大輔は罪なうして
亡命し、忠義によりて罪を獲たり。皆是因果の係るところ、縁故を推とれば
もとより義実が慾より起れり。物がいはせて八房に伏姫を許せしは、赦を
まげし玉梓を助んといひし一口の過言、前の露は末竟にこの溪澗に落あふて、
うつしき山に生死の海を見ることを悲しけれ。さればとて歎くは益なき
ことなり。神霊に正あり邪あり。神の怒りを崇といふ。鬼の怒りを崇と
いふ。彼玉梓は悪霊なり。伏姫が死は崇なり。大輔さへに脱れず。不憶罪を
得たる寔に故あることなれば、憾ることなかれと身を縷ていと叮嚀に諭し
奴が叡智に感じく、孝徳はしかれども小膝を進め御旋によって父が自殺も
身の落命が暁るに及れり。さりながら猶疑ひあり。八房までに甚

提に入らバ。悪灵祟をなすといふとも。君ハ權者の示現によりて。姫うへを
訪ひ給へバ。継定業にまします共。神仏のちからをかりて。一十日を延
るし。姫うへ山中に在ませバ。登山その甲斐なかるべきにハあらざる故にゆるさん。
と同き事なれバ。貞行も小膝を拍て。側よりも大輔殿申をさへ。これ君のこゝに
ましませバ。一十日を晴ぬ川霧の。忽地晴る事ハ。和殿が父子を神佛の冥
助あるに似たり。その実ハさる事非ありこそ。かゝのこる事ハ某も。と絡るがごとし。と
真実ごゝちてゆくまゝに。義実朝臣うち点頭て。これも亦神なり。給ハ定ぞに
言ひ辨ぬれども。禍福ハ糾る纏の如し。人の命ハ天に係りつこれとの山に
到ぎて。伏姫むなしくならんにハ。渠只犬の妻といはれん。則姫が節操
徳義と。八房が菩提に入りし事。親にも世にもしらせんとて。權者の導き
なるべし。然るならん。ゆくゆくハ玉蜻の息あるうちにあひたまへ。その甲斐なしとも

べからず又川霧の晴間なくて。伏姫も八房も大輔に撃れ。死しハ共なる
この川の水屑となりたる。縦遺書ありとのふとも。しらざるものハ
情死といはん歟。さては遺恨のなきにあらずや。今さらいふべきやうなけれ
ども大輔が父八郎ハ功あり。されバ賞を受ども自殺せし事不便也。
嗣なくその子をとり立て。東條の城主にせん伏姫をめあハして妻せんと
思ひ折から。大輔ハ使して遂にかくならざ。伏姫ハ八房に伴れて深山に
入りぬ。さるに至りし事が宿念画餅となりて。いたづらなり。と給ひに
愧るにあらぬ。この婚縁ハ明ら地にとり結ぶにあらね共も親がゆるし
許せしハ伏姫に示し給ふ神童が言葉にも。親と夫にあはんといひ
又夫ハ汝をいふなるべし。かゝる故に姫と犬とハ大輔に撃しめたまハ。
則權者大方便の妙所といはんもいとかしこ。因縁かくのごとくなるハ。

雖をろ咎。雖をろ恨ん弦強けれ。かゝるべき弛む物極れハかゝるべき休
今まゝ〳〵てこゞ家ヨ火の障礙をあるべくまゝ子孫やすとく繁昌
せん欲さハ思ハざやと諭し給へ人ハ貞操も孝德も疑念ハ春の氷の
とく。解く落涙をこゝろけるを且〳〵孝德ハ襟を合せ形を改め
冥加ヨ餘る君の高恩ハ身月中ハ秘させ給ひし。婚縁のるのどゝ
うけるゝ人も物体る。固よりをろぬとゝろありて姫ゝ人を
救ひとゝんとせ〳〵とのやと後みぞ人ハ只速ヨ某ゞ頭と
刎させ給へうと又他るもるくヤけを。義実とを他ハまゝ
勿論のるぞう。さゝとるゞゝ。他ハつけくつゝくゝをゝ伏姫ゞ殘ハと
殘るとゝ。生をとゝるのあゝハ母を殺をも早ゝるぞや。これ熟この
殊數をゝるゝ如是畜生ゝゝの一句ハさゝゝゝまゝかゝるゝく。

仁義ハ行を示をとのゝ。霊驗ハ失べゝまゞ。小虫ハ姫ゞ倒るゝとゝ。
殊數その身を離をゝゝハ殘る是ゞも絶ハゝ。渠ハ辭を時よりしく。
ハの殊數をゝく安危を知をゝ。縱命數彈るとも。初ゝハ利益るを
とあゝんや。縛協ゞゝ是非もるゝ。かくてや已ん。と鞆ハ掛る殊數をを
あげく額ハあゝ當且く会ゞくく伏姫の襟ハをつゝゝ掛るゝ。負約孝
德左右よをを。むるゝき骸を抱起し。後行者の名号を唱ゝ。只顧祈
会を待猶ハ伏姫忽地目を睜きく。一息吻とつを。負約孝德欺
喜ハ堪ゞ。姫ゝハゝをつゝをのゝ欺義人をてゝゝ。大神をくゝゝ。ゝん
父君もゝゝゝをのゝ。欺義人をてゝゝ。大神をくゝゝ。ゝん
ゝをゝ。取ゝをゝるを欺ゝ。欺ち諸袖顔ハあゝ當て只潸然と泣ゝ
ゞ現理ゝ。と義実ハ間迫く寄く袖引揺ゝ。伏姫さのゝ愧のゝゝをくゝ

主従二人のゝ後者ホハみゑ麓ヨ在り。此度母の願ヨよりて義実みぞ
うゝ来つゝ。一朝の幾ヨあゝまど。權者の示現ヨよ為ものゝ。ホ人ガうゝ
又ハ房ガヨ。さゝみ遣書を見くゝ。ホ為ホ金碗大浦ハ去歳ヨ
上総のくゝホをり。ホ人ガうゝ死偽作て弱冠の一トもぢざゝ絆ヨ。絆の
顛末問も定めぞ。ホ人ガを救ひとゝんとゝく。ことより先ホこの山ホ
潜び入つゝ八房を撃倒しゝ九援て。ホ人ガも浅瀧を負ゝり。八房ガ
死ハ不便ヨ見とも大浦ホ勢ひしゝヨ。ホ因縁ヨ死ホあぞ。渠も
ヨがあゝヨとゝヨ。女婿ヨせぞやとゝひしゝ。ホんさゝびて書遣されし。
ゑゝ神童ガ言ヨめも。親と夫ホあんよ死いゝぞや。枉て滝田へ立ゝり。病
髄ひし母ガあゝ死慰めゝんやヨ伏姫ど理ヨ切て諭しゝ。八犬ハ貞操ホのゝ
ともホ伴帰館のヨ勿論ん一旦の義よりゝく八房ヨ伴ヨ一年あゝり

ニのみホ隠りゝべ。その事果ゝり。よゝや是より道世のホん志ふくとゝ
孝行ホんえゝさゝんゝ。ヨ世ホんとゝらゝり賺ゝり勤ヨ。ホ
伏姫ハ涙ヨ為ゝ抑ひ舊ノホ人ガ。ホ親乃
みゝゝ迎へホ仰死背き為ゝんや。かくまで過世ゝ引の山の獣ホ異
ホゝく火絶ヨ打ヨくホ人ヨ絶ヨ。入ゝくホ外ヨゝ。罪滅しゝヨ
為ゝんホ。そヨもかゝゝまぞゝ。ヨ。
ヨくく阿容ことゝいづその里へかゝゝ。この形容を親ヨゝんせ人ヨゝ
片羽ヨゝ子ハ可愛さも八しホヨゝとと鄙語ホいゝホとと欲飽ゝでホ
慈愛せホヨゝ為ホ家尊家母のホん歎き聲ていゝ。夜の鶴つま恋せねど
ヨゝとも又焼野の雉子ヨゝとゝ鳴く。涙の雨ハ沸ゝり。ヨゝ久為ゝで苦しゝ
海を。ケ脱ヨゝん。と命毛の。筆ホ迷せしゝどくを何とゝんさせホゝん

火宅を出る煩悩の犬も菩提の友なるよしぞ。この身は絶て穢されねど。犯
さるゝ縁ども山菅の実ならぬ身さへ結びては有無の二ッをのがれがたし。
決めかねてぞ侍るかし。又父うへの仰ところに、婿がねと豫よりて思
食さるゝ詞のおもむきも。この期よりて云云と答へさせ給ひては人も
得しらぬおん行状かさね給はせなふならぬやとや。譬ば金碗大輔と侍伏八房よ、
の因みありといふとも親のゆるしに許させ給はずし。夫よ肩えて八房よ、
伴ひ来ぬれば。そんなのうへにこそあるれ不義に侍るべし。素よりまゐらせしは
婿がねの。おもひとおもへるよしもあるまじこゝろも集もあらずぞ。
君只独り知召ば墳に剣を掛るをよし又八房を夫とせず。大
輔はこゝへこそ来ぬるに讐に侍るめれ八房も見ず夫に侍らず。
大輔も赤しらず良人なりとまゐるの身は独り生れ来て。独りぞ帰る

出の旅路めなるおん慈を過て、あまり情なしといふもかしこし親の
恩なくば高き山斧の迎へ推侍なましは不孝の上の不孝なり。又おもひなさ
時も日もえ見えぬ親のおん顔も。見つゝ嘆きあへぬ恨の身に重き
罪障のなさけもあれ故なりとはいへ捨させ給ふよし。あれよのよしを
母うへに勧解言告く。百年のおん寿を願ふのみとてもかくても済ま
さん姿をつらねまゐりて亡骸かくれも無益なり。孕婦の新鬼も
みな血盆に沈むといふそれまた脱れぬ業報なれば、厭ふも甲斐なき
となからん。その父なくて由中くも宿れる胤をもちたるまどもも。我の惑
ひも人々の疑ひをも又いかで解くべきとしも見えなんと臂ちかくなる護身刀を
引抜て腹へぐさと突立て真一字に掻切給へば。あやしむべし瘡口より。
一朶の白気閃き出襟に掛させ給ひたる彼水晶の珠数をつゝみて。

八犬傳二輯卷二
犬川荒五郎
金碗大輔孝吉
犬坂毛野胤智

八犬傳二輯卷二
十九
肝を刎ねて
伏姫八犬子を
走らせ
きさらつひ
伏姫
さとみ使

虚空ゑ升ると見えし。殊数八忽地弗と割離まく。その一百ゑ連孫〳〵ゑゑ地上へ墓と落ちまつる。空ゑ遂まる八の珠ゑ。紫雲と共ゑく光明をたゝつ。旭遠り入素ゑ。赫奕る光景八流ゑ星ゑ異るゑまで。主殺八今さゑ姫の自殺ゑ禁めあくまでこれゑもあくぐ蒼天をうち仰ぎく目ゑ見白ゑ。あまよく。とこる程ゑ颯と音〳〵く。末所山おろ〳〵の風のゑゑ〳〵八の灵光八。八方ゑ散失く。跡八東の山乃端ゑ多月のゑぞさ〳〵昇る。當是教手の後八犬士出現して遂ゑ里見ゑ家ゑ集合。萌牙をゑゑゑ〳〵くるべ〳〵。かくても姫八深疾ゑ屈せず。旭まる灵光を目送ゑく。歎〳〵やこぶ腹ゑ物ゑ。〳〵ゑゑゑけり。神の結び〳〵腹帯ゑ。疑ひゑ稍解ゑ。浮世の月ゑ見ゑ〳〵。いそぐ八西の天ゑ。導ゑゑ弥陀仏と唱ゑあくぐ。

ゑ鞘ゑ鮮血ゑ塗る。刃を抜捨そぐまく。磯と蛛〳〵ゑ。ゑゑ言ゑゑ女子ゑ八似げゑゑ。ゑぐゑ。最期八特ゑあゑゑ。

第十四回

轎を旭〳〵く使女渓澗を渉
錫杖鳴〳〵て大記總を索

かくゑゑ。負ゑホ八伏姫の自殺を禁めあくゑも。挿頭の花を散せ〳〵く遺感ゑゑゑゑけゑそぐ中ゑ孝徳八男子ゑゑ。姫君乃末期の一句ゑ激さゑく。刃を措とゑゑなゑゑん亡骸のゑとりゑおちる血刀をゑゑ取て。姫ゑび腹を切らんとゑ。そのゑ旭笑実声を姫ゑ立。ゑゑ大蒲狼狽ゑる歎ゑの刃ゑ大罪あゑなぐら君命を俟ぎ。ゑく自害せんゑゑ奇怪ゑゑ。伏姫一旦甦生ゑゑゑ八罪一等を宥るゑゑ。この山ゑ入るめの八頭を刎んと掟〳〵ゑゑ。法度を枉てゑゑゑく。腹切る。

とぞ聴んや観念せよと進よりて刃を引提立身ハ願ふところ。と孝徳ハ
居ながら合掌し項を延を待るく上に見く刃の稲妻丁と討る
さちを。大刀風に靡ひけるく孝徳が髻弗と截捨ぬ人ハ是いかに。と見る罪人も
諫う絡うる貞行も驚き呆ふ仁君の恩義にいとど畏る義実ハ氷なるを。
刃を安をら鞘に納く泛る涙を拂ひつんよのや義人ぞ見つら罪人を
刑罰せり。法度ハ君の制まる所君又これを破るといふ古人の金言宣なる
なりこれより民とおろ共にこの山に登ろなるハ大輔に祭るの逃じ跡に
代る髻ハ渠が亡父へ寸志なり。渠が擧き時より名を大輔と喚
做せしハ大國輔佐の臣こそとその久後を祝せしに渠が官職もやうやく進て。
治部大輔と大輔と。その國訓ハ異なれと文字ハかわらぬ主従同名かる
故なりや主の為にあるべき崇なす身に愛る。可惜しき壮佼がよに埋木と

なからんず。かくまでも不便ぞ親八郎ハ大切なりし大輔も忠なれにあらねど。その
親といひその子といひ勲功あれども賞を獲ず。その死に臨てその罪に
陥るに及びて主尚赦ふによしなかる。渠が子にまして哀傷の涙へ赤くに
禁めかたし母よ大輔よ孝徳よ渠が心ころ狄よくも知らバ亡親の為姫が為に
命なたのち身を愛し佛につかへ苦行して高僧知識の名を揚よさらば孫ぞ
ちるまや。と叮嚀に諭し身ハ孝徳ハ辱なさにたちふり落る。涙に咽び地に伏て。
憶り絡つ声を咽む理ならぬ貞行ハ鼻うちかみて進ミ出今になりてぬ
君の仁心姫うへの御最期まで卿が末しきるまでも家臣のうへ念かくまでに。
伸のえさせ給ふる。大輔和殺が身にとりては一郡の守護万貫の禄にもまして
満足なからんといひまして兮やく頭を撞某寔に不肖なれとも如是畜生
ども菩提に入まり今よ日本廻國して灵山灵社を巡礼し。伏姫君の後

世代吊ひ弔ふ君は父子の武運を祈らん姫うへの落命も又某が祝髪も亦
八房の犬也。この犬といふ字を二ツに釐き犬ゐも及ばぬ大神が大の一字と
そろまらゐ。犬と法名付らん。とヤ上ぶ氏実朝臣適いくをもとさう件の犬を
全身は黒白八の斑毛あれば八房と名つけしが今さらゐべ八房の二字は則
一尸八方に至るの義なり。加藤伏姫が自殺の今果に痍口より一道の白氣
ゝ引。仁義八行の文字顕はれる。百八の珠因さ冲至。文字ゐ化珠は地に
墮ち。その餘の八ゐ光明をたちうち八方へ散乱ゝ遂に跡なくゐ至ゝ。
其所以ゐ後に至ってゐべ。ゐひあらさ活るゐやあらん苦損乃
首途の餞別ゐ只この珠数はゐ様ゐ努力せよ人道と諭して
賜ゐ孝徳はゐ受て。再三さびうち戴き。右ゐ君の賜ゐの今ゐ
緒圓氏編歴ゝく。旅去る八の珠の落る所氏霊孫ひとめ。ちゐめのどく繋ぎ

とゐん。一百八の数は満ぎゐ又當國へ立ゐるゐく見ゐ入ゐ伊氏歴るとも
音耗ゐゐ旅ゐ行は野ざゐの獣は餓ゐ犬の腹を肥ゝゐゐと思ゐれよ。
是ぞ寔ゐ今生のもん別ゐゆべゝとゐひ切ゝぞヤけるこの時既ゐ日は暮ゐ。
夜はゐゐや初更のゐろゐゐは昏ゐゐ雅明ゐゐける月は半輪の雲もゐく山ゐは
萬樹の影あり。襲ゐた岳水の音。親ゐた岳松の声陽を遮媒ゐゐゐ鹿は峯
上ゐ鳴ゐく。白露の霜とゐゐ氏悲ゝ猴は幽谷ゐ叫ゐく孤客の夜衾を寒ゝむ。
孚は茱て紡ゐも寂ゝき深山路ゐ分ひ行ひさまゐん。
伏姫のゐ氏のゐ。主殺頻ゐゐゐ感嘆せゐ當下堀内貞行は孝徳ゐと殘ゝく
ゐゐゐ。姫うへの自殺はゐゐく。時氏穏させゐひゐゐ日ゐ暮山は嶮ゝきゐ下
向は氏のひゐ。さひびゐく夜ともゐ。ゐゐは明させゐひゐゐもん亡骸をゐゐゐません。
毒蛇猛獣の患ひとゐべゐゐ。進退究めゐく難義ゐ和厥は左平とゐ

山清堂蔵

ちひろと問ふく雲時沈吟ドいふく所理まえとふく曉させもうんとふ遠慮
うるを似ふう。所詮和殿と某と姫の亡骸を舁きまえこぶ君ハ出ぬだうち
蕉火を把せめひく。下山をいそぐせもうん狩麓まへもん倶の人々を留めもひ
やとうけもうんへもん迎ふまぐ。緩そのの共耳怖しく。この溪洞を渉さぶた
前面の岸よりあるをもく遭ぎらぐとふあじとの幾ハのぐとうち相彈ふ
義実とふ死体のあくを伏姫まろ只もう。去歳ふとふ在ふけるの死
弓箭とる為の主殺二人毒蛇猛獣をあそるくみる一夜亡骸と成るをかる
つを遠く麓ふぐとんや。此をちひ彼死ろふ男児ふしくこんまり死伏
姫が心操親まづうきのぐじ五十子ふ泣ふまるくぐと。
みづう姫を給しふ今さう慚愧ふ塩ぐとんとの有ふ今その死ふ及びて。
こと一滴の涙とふをぐ魂魄いまぐとふ去ふまぐ汝遠が幾論女ー

とく伏姫ふ矢ふをもん枝死をとふく火を焼つけふとふ割竜を刺ふくべー。
いそぐとうと宜へべ貞彩孝徳感激しく且伏姫の亡骸を洞の中へ入ふる
らせ主殺石門の樹下ふ圓坐して老づふ天の明る死ふちろう浩然ふ前面の
岸ふ鞍の焦火因ろく人猟幽ふ体のえろ負彩遥ふとふ死ふくさふ
人ぐもん迎ふ来ふとふいでやとの激死渉せん。とふひる絶らぐ衝と立て躍く
水際ふまり出其外ふふ蕉火ハもん迎の人ぐうぐ厲ふとうるふ在ぐぞ。
吾仏既ふこの川死渉せう。風体ふとうふうふ流ふ緩く瀬ハ浅ー。とく
渉ーゆと声を限りふ呼びうふ折ふー追風ふるとふ。その声定ふ体のえ
けん焦火をもちとちと内ーふ坂をぐう。岸ふをう立とおぐーくて先ふまむ
ふ後ふ続くふの馬を牽入ふ書ふをあじく人鞍渉ーふるとふの岸ふ死
えふとうひろふ女轎を釣蜚とふふ拮死。健なう男七八人赤裸ふく

山崎蔵

こゝに氏舅さり。その餘八麓ゑ送さ邑。後者又瀧田より来るもあり。臭汐
こゝに氏舅ゆく。あるいふと同ふ狩ふ轎子を舁ゐ邑。衆皆水際ゆゑみく
いふ。日の没ゐんとせ。比まぐ。屋方の帰よせゐ。孩べ吾们既ゆまう。合せ
途まぐ迎ゆゑんとゐく立出ゆ折。奥ざゐより火急のゆん使来れり。ゐゐゐ
ゐ。あ
共ふ歩をいゐ。迎ゆゐ。ゐく程をうく日を消。あゐこの岸まぐ来邑ゆ。喚
ゐく
みゐゐく吾们のゐ。海をべうもあふざゐ。ふ雨具続松など氏。乗て来たる轎
ど。ゆ
基ゐ彼ゆん使の轎子を拾ゐ。辛くも海ゐてゆといふゐ。臭汐ゐち点灯ゐゐ
いゐ
微妙ゐゐゐふゐ。ゆん使ゐく。ゐ邑へといそぐせふ。五六人立かゐゐてゆゐ
ゐ。ゐ
細引の麻富氏解ゐゐ。轎子の戸を引開けゐ。ゐん使へ専女ゐ羊
氏。ゐ
紀ふ四十あまり。ゐふ柏田ゐぞいふゐ。いぬる比伏姫の安否氏ゐぐゐゐゆゆ。密
ぐ
使をゐみゆふゐく。前面の岸まぐまゐゐゆゆん。ゐとの日火急のゆん使ゐゐぐ。

道竟轎夫を死させてや。ゐゐ。ゐ久。轎のゐちゐふ。三尺あまりなる白布と
結びさげ。ゐ。ゐ。ゐ

君をみづから防せむとて実は富山に赴くなりけり。一日隔せる翌朝かうまを
奴に牽かせて来まさんとてらくらくの人々集まる。富山は名さる麓
所と使駆り被れへ赴くなり。異なるくさの罠りなんとく喚くなれとしかうり
なんぬ曹司もいとせんまじ向まさとと柏田は被山の紫内に初るのとう
ものさるぞ屋方生させ給へくよりまぐ一時は過べうまじいそぐ途まて追著
る。あるくさよりに成べくヤせと宣ろとるに物とあくまじ遠て御館とはー
まと人疲労るまに里くまく肩を継せ歩に急ぐせ辛くまるるとこ
まうと折ら外面る。後者は駿ぎさち前面の岸に隠と火の光見えらう。
今は水際まをと立ちる。あとは正ろ轎子るくんそとちあるぬ。とでろとに
罵散動声罵ちる。負約孝徳なあまぐ走て出るうち眺め再度の急弦に
ちるーとるまより扶掖とく渉させよ。下知まとはるるとるつ。彼

約墨を紅あげく。究竟の奴隷十人あまり流水に切て石を踏除あるこの岸に
赴るくるものどく約墨に轎子を指ろ。その後者はるる共に駕ごろへ
渉くまつ且轎子を舁ろ。とく戸を開けば裡より出る一個の女房その
年は廿九に足らざるの名に接織と唱るくの婢娟る額髪に練の鉢
巻ろる精悍くに打扮は柏田にまくくんぐすりかくく接織は轎子を出ると
ぐく氣絶る忽地に倒まるくぶ負約孝徳驚きく顔に石湯を沃ぎうけ。
芝に飲せさまくに勤る程に是はるるくく負約に接扮を固にて
かるるに使に撰まるるのまぐ長途の疲労を物ともせず負約孝
徳に渉りくるに前に来りるに氏実さ安く声をかけく一度なるまぐ
再度の使はいとくぶりとるとて五十子はるるぞや。と同せるぐ罪と落る
涙を拭ひまぐ奥ざるは今朝已のるるに末はるるるぐ伏沈めに前に来り

山青堂藏

山青堂藏

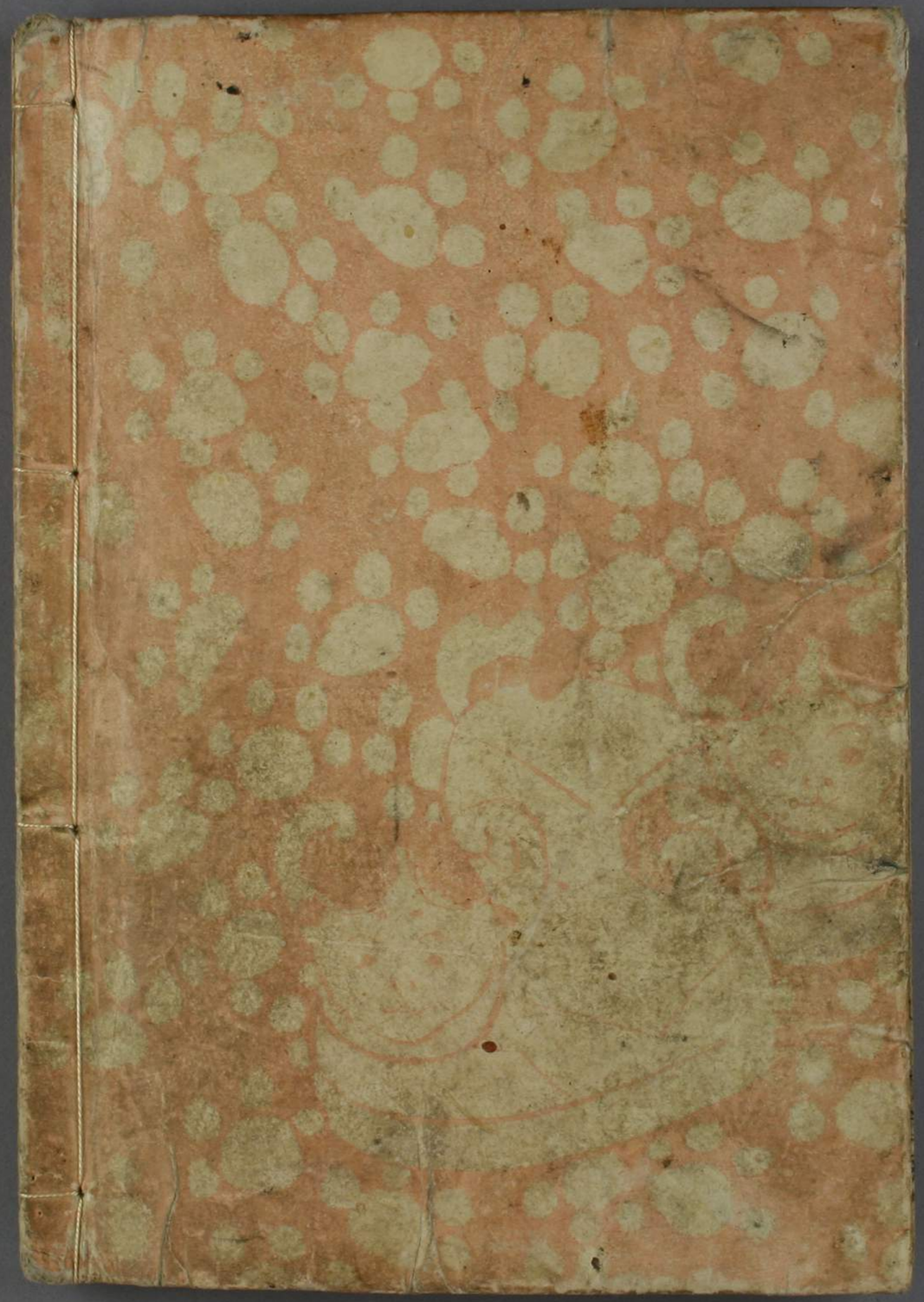
柏田さえ共よりとそ泣よける氏実頻ふ嗟嘆〳〵縛絶ろうと向ひるべ桜
織へろふ頭氏樓に臨絶のるなどへ。ようとまもるるく疎ふ行り柏田がもん
使ふ立〳〵後ひく行もあくどなくうるひぬれ曹司の外ふへ騎馬をりてとの
よ〳〵氏告奇法へ易うまとも。微竹の西登山ろまび憚あるよ汝へ曩ふ柏田と成る。
密使をうけるへつまく。冨山へ赴たうと仕のへまあるうまく屋方よ告れ今霞ふる
過〳〵そといそぐ見へそぐまふ。舁まく糸ふ糸ふ行りさと中上れへ孝徳へ貞行と
面をあへ〳〵頭氏低く嘆息せろ。氏実巨細よ仕のひく。五十子ぞ今般の情顔
行果さ移べるまて亦送臓ろくとも。末期ふあへぬへ妻ひるくんよ〳〵翌まで
存命ろうとも。帰ぎく打とへべたぞ。汝ふも且彼氏よと洞の方をこんろく。
亡骸を示〳〵ふへ。柏田桜織へ自ろち驟ぐく。ち後方ふ立ろうまさ〳〵
入〳〵月氏獨よ洞の中氏伏〳〵。とうく齊一声をたふ姫ろうよあはろ。

猛き獣よ傷ひまふ狩さまどへ刃ふ果ふひんくふ何とせん浅まし〳〵や痛〳〵ま。
と亡骸のまくべ後方ふ轉輾び哽ろりつ泣ふまと氏実こまふ目氏遣り
ろうど。負行ふよ宮ふ出ろ氏成ろさぞ行るうびべたよ人鞍ふ乗ろふれへ暁
かけく山氏ひろん大浦へ十餘人の奴隷ろう共留まく。翌へ伏姫が亡骸を
ひ刃ふ埋葬せよ又へ房をも瘞ろさせよ招ぐ姫が用人をろまふ。柏
田桜織もとのまふ今宵一夜へ送〳〵置ん母の使とうた魂よを向ろふ
通夜させよ葬のうへ箇様ことと叮嚀よ指ろめをんるぞ氏労ひく。
そのとろ氏ろさせろ。後者ふをも賞させく。牽かくまて馬ようち乗
あうこの岸へ赴たのへ送まるのへ孝徳と共よ水際よ踏躇ん後へ者へ
負行ろう共蕉火を燃て照〳〵激瞰氏ま渉〳〵けて。かくてろ次の日午
過く。冨山の麓ろう村長へ法師荘客們ろう共ふ棺を扛く喘こ冨山の

洞を指さしまつる是ハこの曉ゆ義実瀧田へ帰館の折途よりと貞行奉て麓の
村長と法師ハ云云の仰ゆ後るゝ俄頃より棺葬具を造らせ金碗大補ゆ
遣与とゝ。この山深く遣しけるとゝ又この日より樵夫炭焼もとゞ山挿もるゆ
冨山を上下まろとゝ所〻ゆ人さとゞ孝徳入道ハ件の棺を受とりて且伏姫の
亡骸を歛めまつる則洞を截ひらきて人墓所とゝまろとゝ碑碣ろ〻
只松柏双立て自然と墓標とゝ人とゝ所後世とゝ所嗅て義烈節
婦の墓とゆ又八房をも土葬ゆ せり。とゝ所ハ只龕ゆ歛て敢示棺と用ひゞ
まゝ伏姫の墓を造とゝ三丈ばかり戌の方老ろ檜樹の下ゆ瘞む人亦
嗅て犬塚とゆひろ葬のつかの如くよろゞ質素ゝ せ。義実豫て
孝徳ゝ仰つけて所〻姫の志操を汲ろ。事果て柏田掖織も彼
十餘人の奴隷所ゆて法て瀧田へ帰館の法師村長ゆも

里へ帰ゆとゝ。中ゆ金碗大補孝徳ハ圓頂黒衣ゆ容所〻て、大坊と
法号し且山ゆ留まて伏姫の遺し給ふ法華経を読誦ろ。一千日一千夜も
向断ろ。四十餘日ゆ及び ろ。この程ゆ瀧田ゆハ五十子の方の葬式をとり行ま
ろ所〻人〻のもんゆ来賓施行しく民を賑し又洲崎ろ行者の
石屋へ堀内貞行を遣しく物あゆ寄進して素詣のゆ為ゆ道橋を造ら
ゆ人〻ゝ功徳とゆひろ。ゆかくまろ程ゆ五十子伏姫の四十九日ゆ
向とゝ。ゆく嬬男義成朝臣を領主とゝ瀧田ろ菩提院ゆ大歛忌の
法事あゞ。と仰ろ比義成ハこの法慈ゆ大坊をも召加へよとゝ使所
冨山へ遣さしゆ、大ハ山ゆ入とゝ。彼此を尋ゆ樵夫ゆ
ゆ。件の法師ハ豫て入とゝ准後と称ゝ入とゝ及を脊負ひ錫杖を擲
今朝ゝ山所下るとき吾行所所〻人〻ろ瀧田殿ゆ入道所尋ね

るあんこのよーヤせといひうけく。何処とあるく生くゆ死ねかまえ俟せのふたゆ
ゞといふふ。まゞをくく使者ハ瀧田へ立ち久り。緯の翅をヤセーえん兵実嘆賞大くこ
ゝまゞ渠既ゑ誓ひ。六十餘國ゑ偏歴ちく亦去る八の珠を舊の珠数ゑ
繋ぎ苗ぎえ生涯安房へかへらじと豫ていひうとあれば再会寛ゑ揣ぐ遺憾と
なりとと。ひとりごちのひつ再て往方を索ねめぐさるを。ゆ絶ぎや
ありけん、大坊が差るく。ゆ又系るとあぶ渠がよとぶみるのえとて明年
伏姫の一周忌の比まで。ゆ富山ゑ一宇の觀音堂を建立し伏姫の穂ゑ八
房ぶるゆさえ紀ゝく。姫の遺書ゆえ共ゑ厨子のうちへぞ納めゆえ今ゑ尼富山ゆ
觀音堂あり。かくて黙の手氏歴ゑどゞも、大坊が音信ゑ擧竟彼法師が
久後いえ。ゝえ後この巻ゑく解るえ。
作者云。古の書肇輯第一巻ゑり。今この巻ゑ至えゝ則一部小説乃

開場。八士出現の叢端ゑり。見ゑる次の巻ゑ年月相次ぎゝく。いと後の
るゆ及べり。その間ゑ物語ゑる。譬バ彼水滸傳ゑ龍虎山ゑて洪信ゆが
石碣を印くの段ゑり。林冲ゆが出現おぐ。その間数十年。物語ゑる。
又りゑこの巻の出像の中。金冕大輔孝德が川氏海を國のゞ氏ゑ文外の画
画中の丈ゑこの出像ゑよゝざゑゑ忽然とゝく雲霧の晴ゑゆ名氏知ゑ
るゆ又使女の息孤ゑ柏田梭織を写ゝ生ゑゆ。その在郷氏先はてその孫ゑ
後ゑ世り首尾猜乱ゑ仍くゑ氏ゑ。ゆゑゆあゞ其人の小伝未歴後ゆ僅ゑその
人の口中ゑゑ現出ゑ事を先は。ゝく伝氏後ゑを画も亦見ゆ後ゑゆゑり。
ゝゑあゞ画面ハ只その画を画とて。その意を意と沿ぐゑとあり。氏
ゆく作意と岩齣ゑ氏ゑあゞこの巻中もゑゑとあり。看官ゑ察ゞ。

里見八犬傳第二輯巻之二終